
噂のご令嬢

しろくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噂のご令嬢

【Nコード】

N3370P

【作者名】

しろくま

【あらすじ】

”マッドピエロ”を探し続けるご令嬢のリディア。そんなリディアに振り回される執事のアルフレッド。そんな執事とお嬢様の毎日です！多少グロあり。

血塗られた噂〜オードフッド伯爵家〜（前書き）

血とか少しグロい表現あります。苦手な方はすぐに観覧をやめてください。

血塗られた噂　オードフッド伯爵家

知ってるかい？

呪われた伯爵家の話さ。

ある闇の夜、狂ったピエロに侍女も執事も皆殺しにされたらしい
体を切り裂かれ、内臓を引きずりだされ、鎌で首を斬られたんだ
血だらけになったピエロはさぞも楽しそうに笑っていたらしい

それで気になるだろ？

その呪われた家の名さ。

誰にも言っちゃいけないよ

自分も同じ事になりたくないのなら

耳を済ましてよく聞きな

その名は

”オードフッド伯爵家”

――

「リディアル様」

馬車に揺られながら窓の外を眺めるのに夢中になっていて名を呼ばれたことに今気がつく。

「あまり窓に顔を近づけすぎないでください。危ないですよ」

「……気を付ける。風が気持ちよくて」

窓から吹き抜ける風に漆黒の髪がなびいていく。白い肌に青い瞳をした少女

優しく微笑み、そんな少女を見つめる執事の名はアルフレッド。彼も漆黒の髪に緑色の瞳

「もうすぐ街に着くころです。ですが、もう暗くなってきたしまいましたね」

「着いてすぐに宿探になりそう……」

つまらなさそうにばやく主人に苦笑いを浮かべると優しく頭を撫でてやる。

「……なんだ？」

「いえ、リディアル様の機嫌が斜めだったので慰めようと思いました」

一瞬頬を染めるがすぐに頭の上にある手を払いのけ不機嫌そうに言い返す

「子供扱いしないで！」

子供扱い……と言われてもリディアルはまだ子供、まだ幼い少女な

のだ

街は霧がかり、闇に包まれていた。人気のない道を馬車のランプや街灯だけが照らす。宿まで馬車を走らせていると、窓の外から悲鳴が聞こえてくる。

慌てて窓のカーテンを開けるとそこには体にナイフが突き刺さったままの女性の死体が転がっていた

胴体に何カ所もの刺し傷や切り裂いたあとがあり周りは血が飛び散っており、

「切り裂き魔だ！切り裂き魔が出たんだ！」

1人の男性が震えながら叫ぶとその光景を見ていた人達は一斉にその場から走り出す。叫びながら、怯えながら安全な場所を探して

「…リディア様、カーテンをお閉めください」

「アルフレッド、どう思う？」

ただ無表情に死体を見つめる主人に変わりカーテンを閉める。

「どう思うと言われても…これだけでは奴の仕業とは言い難いでしょ」

「　　そう」

「ですが、調べてみる価値はありそうですね」

アルフレッドの言葉に笑顔で頷くと自信に満ち溢れた表情で頬杖をつく。

「明日から聞き込み開始ね。アルフレッド、なるべく情報を集めて」

「はい、ご主人様」

「絶対に捕まえてやるわ
のマッドピエロ」

イカれた道化師”血だらけ

切り裂き魔く奇怪な街く

「……っ……リディア様……」

「なあに？」

「……こ、これ以上は……」

苦しそくに息をするアルフレッドにリディアは楽しそくに喋りかける。

「まだまだこれからよ」

「ですが………あぁっ」

もう立っていられないと体から力が抜け、地面に膝をつく

「もう……無理です………こ、こんな……」

こんな大量の荷物持てません!!!!!!!!!!!!!!」

「なっさけないわね」

地面に四つん這いになったアルフレッドを椅子代わりに座り優雅に

足をくむ。

「リディア様、情報収集のたびにこれほどまでの買い物をする必要はありません！とゆうか、私から降りてください！」

「そお？全部気に入ったんだからしょうがないじゃない
それに、多少は情報が集まったわ」

切り裂き魔は霧の深い夜に現れ、主に女が狙われる。身体中をナイフで切り刻まれ酷いときには体内の内臓がえぐり出される

「ですが、ありきたりな情報でしたね。これだけじゃ”マッド
ピエロ”の仕業とはいいい切れません」

もつと他に情報はないかと考えるとふと疑問が頭に浮かび上がる。
みな何か様子が変わった。情報収集をしたとき、何かに怯え言葉を
はぐらかす。

「みんな何かを隠してる……」

すぐ横には、酔っぱらい達の怒鳴りあいや殴りあいなどで騒がしい
古いバーがあった。

「…アルフレッド、あそこのバーに聞き込みに行くわよ」

「っ！？それはいけません！危険です。第一リディア様はまだ幼い

のですからバーには入れません」

そう言ったアルフレッドの足を思いっきり踏みつけ睨み付ける。

「だったらそれを出来るようにするのが執事の役目でしょ…？今すぐ宿に帰って変装するわよ！」

一度言い出したら聞かないリディアの性格にため息をつき仕方なく後を追いかけた

宿に着くとさつき買った荷物の中からいくつかの箱をとりだし服を着替える。

白いシャツにチェックのベストとお揃いのハーフパンツ。靴下にブーツをはき長い髪をキャスケット帽の中にしまい込む。

「これはまさか…少年に変装するとは」

「どうだ？これで俺が女なんて気がつかないだろ？」

「男にしては高い声、細い首。あそこの連中はだいぶ酔っていますから気づく事はないと思いますが、普通の方はすぐに気づきますよ」

自分的には完璧な変装に文句を言われて、頬をふくまらし拗ねた表情をするとそんなリディアをなだめようと優しく微笑む

「…ですから、私の側から絶対離れなidekudaisai」

「わかってる、アル以上に信頼している者はいない」

切り裂き魔〜切り裂き魔の噂〜（前書き）

リディアが出てこない…（笑）

切り裂き魔、切り裂き魔の噂、

バーの中では様々な人たちが酒を飲んでいた。
酔って床に倒れている者や机の上に立って歌っている者。

リディア達はカウンターの席に座り、店の中をぐるっと観察すると、
店のオーナーらしき人が喋りかけてきた

「いらつしゃい、ご注文は？」

「私はアルコールが少ないカクテルでこの少年にはオレンジジュースを」

やはりバーに未成年の少年が来ることは珍しいらしく、リディアの
事を珍しそうな目で見るとドリンクを作り出した

「ほらよ、兄ちゃんあんまりガキをこんな所に連れてくんないよ」

「おとなしく宿で待ってるように言ったんですけどね。どうしても
付いてくるって聞かないんですよ」

あからさまな子ども扱いをしてくる態度にむかついたりリディアは2
人の会話に入り込む。

「子供って馬鹿にすんな！」

「なんだと！？ガキ、お前いくつだ？」

「15歳だ」

「15！？嘘つくな。11くらいだろ」

リディアはその言葉に固まった

確かに見た目は幼くいつも本当の年齢より幼く見られていたが、4歳も下に見られた事は初めてでショックを隠しきれない。

そんなリディアを見たアルフレッドは急いでフォローをするがりディアはまったく聞いていなかった。

「あんまりいじめないであげてください。彼は童顔なのを気にしてるんです」

「そうなのか？男ならそんな事でよくよすんな」

リディアはつんとそっぽを向いてジュースをいつきに飲み干す。

「それより、この店のオーナーはあなたですか？」

「ああ、俺だぜ」

「私達は旅人なのですが、さっき恐ろしい噂話を聞きました。・・・
・なんでも”切り裂き魔”がでるんだとか」

亭主の顔がいつきに青ざめグラスを拭く手が止まり、さっきまでの声とは違い、小さく震えた声で喋りだす

「お前達も気をつけた方がいい、その噂は本当だ。街では何人もの女が殺されている」

「そうなんですか・・・騎士達は何をしてるんでしょうね」

この街で騎士がパトロールをしている所を見たこと・・・がない。”切り裂き魔”がでたというのに何の処置もしていない騎士達をアルフレッドは不思議に思っていた。

すると亭主は口を閉じて黙りだした。それを見たアルフレッドは確信する。

（やはり・・・何か言えない事があるのか・・・この亭主なにか知っているな）

探るように見る視線に耐えかねた亭主はため息をつく。

「あんたらは旅人だから知らないと思うが、もう1つ噂があるんだ。この街の奥に大きな屋敷があるんだが、それは領主の屋敷なんだ。そこの息子が”切り裂き魔”なんじゃないかって」

「・・・領主の息子が？」

「ああ、だから騎士達はなにもしないし出来ないんじゃないかって。犯行を目撃した奴が言ってたんだ、顔がそっくりだったってな」

アルフレッドは顎に手を当てて考え込む仕草を見ると、リディアの肩を揺さぶる。それでも、そつばを向いているリディアの腕をつかみ椅子から立ち上がるうとした時、誰かがアルフレッドの隣に豪快に

座りこむ。

「あんたら旅の者なんだってな！話は聞こえたぜ」

顔を真つ赤にしながら片手には酒が注がれたジョッキを持つ男が興味津々にアルフレッドとリディアの顔をのぞきこむ。

「おめえら”切り裂き魔”に興味があんのか！？」

大声をだしながら酒を飲む男を無視して立ち上がったとき腕をつかまれる

「おれあ詳しいぜ、”切り裂き魔”の事ならな」

一瞬目を見開いたアルフレッドの態度に気づいたのか、自慢げに鼻をならす男を亭主が睨み付ける。

「アーロン、余計なことを言うな」

「余計な事！？はっ、あんちゃん達よく聞きな、”切り裂き魔”にはもう1つ噂があるんだ！」切り裂き魔”の招待はこの街に住んでる領地のメイドなんじゃないかってな」

「・・・メイドが？」

話に食いついてきたアルフレッドに満足したのか、話を邪魔してくる亭主を無視してアーロンは楽しそうに語りだす。

「ああ、そうだ。なんでもそのメイドは領地の主の息子に恋をした

らしいんだが身分違いでな、その恋は叶うはずもなく息子は別の女性と恋に落ちた！それが気に入らなかったメイドが主の息子の恋人を殺したのが”切り裂き魔”の始まりだよ！」

亭主は大きなため息をつく

「馬鹿らしい、そんなの根も葉もない噂だ」

「さあどうだかな！実際に殺されるのは女性ばかりだ、なんでかわかるか？！それはな、その息子が他の女と恋に落ちないためなんだとよ！殺された女達の容姿はどうだった？！みんな肌が白くブルーの瞳をしてなかったか？！その息子はな、そういう女が好ましいんだ！だからメイドは息子好みの女達を殺しまわってる！」

「そんなのただの作り話だ！くだらねえ」

「ガハハハッ！くだらないだと？そういや、お前の娘もあの屋敷で働いてたな？」

その言葉を聞いた亭主の動きが止まり、アーロンを鋭く睨み付ける。

「何が言いたいんだ？」

「俺が言いたいのはこうゆう事さ、娘と連絡とってるか？たまには家に帰ってくるか？もしかしたらお前の娘が”切り裂き魔”かもしれないぜ！」

頭に血が上った亭主は持っていたグラスを床に叩きつけアーロンの胸ぐらを掴みかかる。握りしめた拳を顔面めがけてつき出そうとし

たが、それをアルフレッドに止められ、邪魔をするな！と叫ぼうと周りを睨み付けようとしたとき、幼い少年が目についた。

目には大量の涙をため、不安そうにこちらをみる少年が。亭主はすぐに冷静になり殴りたい衝動を噛み締め、怒りに体を震わせながら胸ぐらを掴んでいた腕を解く。

「ふざけるなよ、俺の娘を侮辱するな！」

アーロンはおもしろそうにニヤニヤしながら言い返そうとしたが、それよりも早くアルフレッドが口を開く。

「噂で他人の娘を疑うとは、あまりよい事ではありませんよ。まあ、あなたの噂が本当だとしたら・・・の話ですがね」

「はッ。俺が噂を作ったでもいいいてえのか？」

「いえ、そういう訳では。では我々はこれで失礼させていただきます」

カウンターにお金を置いて店から出て行こうとする2人に亭主は忠告をした

「あんまりこの街に長居しない方がいい。襲われるのは女だけでも気をつけるよ」

「心配ありがとうございます」

「俺の話が聞きたかったらいつでも聞きにこいよ！」

アーロンの言葉を無視してアルフレッドは亭主にだけ微笑んで挨拶すると店から出て行った。

切り裂き魔く怖い夢く

「大丈夫でしたか？」

宿に入り着替えをすましたリディアに温かいお茶を淹れる

「大丈夫、怪我はないわ。アルフレッドこそ、あのアーロンって男を庇ったとき腕を痛めなかった？」

「私は体の事じゃなくて……リディア様の心の事を言っているんですよ」

心配そうなアルフレッドの声にリディアはどこか遠くを見ながら微笑む

あの時の記憶が舞い戻る

思い出したくない記憶

あなたは誰？

手を伸ばせば届きそうで、すぐに霧となって消えてしまう
だけど、どこか懐かしい匂い

絶対的な安心感

あの日までは。

「っ！！」

急いで周りを見渡せば、そこは宿のベッドの上だった。嫌な夢を見
たせいで額には脂汗が噴き出しており体がわずかに震えている。

「・・・アル、・・・アルフレッド!？」

不安な気持ちで彼の名前を呼べばすぐに側に来てくれる。ベッドの側に片膝について優しい手つきで頬を撫でられ安堵のため息をついた

「・・・私はここにいますよ、怖い夢でも見たのですね。何か温かい飲み物でも飲みますか？」

そういつて立ち上がろうとするアルフレッドの服の裾を掴む

「・・・飲み物はいらない」

「そうですか」

・ 涙目のリディアが落ち着くまで優しく頭をなでる。何度も何度も・

「昔の夢を見てた　お父様とお母様、それにお兄様・・・みんなの側に走っても、手も届かない・・・それなのに、皆はどんどん遠くなる・・・」

ぽつり、ぽつりと呟く声にアルフレッドの胸が痛くなる

「いやだ・・・ひとりはいやだ・・・!」

ベッドの軋む音がした。強張って小さくなった体に腕が回され抱き締められる

「私が側にいます、リディア様の側にずっといますからリディア様

は1人ではありませんよ」

切り裂き魔ゝ怖い夢ゝ（後書き）

短くなってしまった…汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3370p/>

噂のご令嬢

2011年1月8日11時35分発行